

絵巻

|| カラー | 28分 ||

企画 東京国立博物館
製作 桜映画社

■解説■

平安時代に、それまで中国一辺倒だった文化からわが国独自の文化が育つが、その一つに漢字から仮名を創り出したことがあり、また身の生活や季節の移り変りを繊細な筆づかいで描いた「やまと絵」の誕生がある。この絵画と文学を綜合し小型にしたものが絵巻で、室内に慰みを求めた貴族の生活の中で世界にも類のない発達をとげた。絵巻は、左手でひらき右手で巻きながら見ていく、平安貴族が創り出した昔の映画だ、とも言われている。

このように絵巻の誕生は、平安時代であったが、今に残るものは、平安後期の「源氏物語絵巻」、末期にかけての「鳥獣戯画」、「伴大納言絵詞」、「信貴山縁起絵巻」と数は極めて少ない。しかし、いずれも非常に傑作である。「餓鬼草紙」「地獄草紙」などは、平安時代の最末期とも鎌倉時代初頭ともいわれている。

鎌倉時代は絵巻の時代ともいわれ、社寺縁起、高僧伝、戦記絵巻などが数多く作られ、また沢山残っている。それらの中で、戦争を主題とした「平治物語絵巻」や、高僧伝の「一遍上人絵伝」が代表的な作品としてあげられる。

これらの絵巻の傑作を、時代を追って見ていくと、貴族(古代社会)の崩壊と封建時代のはじまる中世の初頭の社会を鮮かに描き出している。

平安貴族が作り出した絵巻という形式が、奇しくも己の没落を大きなドラマとして後世に伝えているのである。

■あらすじ■

はじめに平安朝貴族の生活と、仮名、やまと絵の誕生など、絵巻を発達させた背景が描かれる。今に残る絵巻としては最も古い「源氏物語絵巻」は、いかにも貴族が製作したものらしく耽美的である。しかし、ほとんど同じころに、对象的に動的な「鳥獣戯画」が描かれている。この不思議がこの映画の発端になっている。源氏物語絵巻が書かれた十二世紀の半ばには貴族の支配力は既に衰えており、京の街には田楽の熱狂的な流行などもあって、最早騒然たる時代であった。

「伴大納言絵詞」は、その貴族の争いと没落を、それに巻き込まれる民衆のはげしい動きをまじえて描いている。一方、「信貴山縁起絵巻」は都から遠く離れた地方の自然や庶民の生活ののびのびとした筆で描き出している。それはいかにも健康で、人情のこまやかさを感じさせる。発端で暗示した貴族と民衆の対象が、ここではより客観的になり、具体的に大きく展開する。

「餓鬼草紙」「地獄草紙」などの、いわゆる六道絵巻は、没落する貴族たちの心の風景とも見られよう。また「平治物語絵巻」は、戦乱の中で武家に権力を奪われていく貴族の現実の地獄を描き出している。こうしてドラマは一転して次の時代を迎える。

結びの「一遍上人絵伝」は、貴族の時代が去った鎌倉時代の、民衆の姿を随所に垣間見せ、また四季折々の情景を、「やまと絵」の伝統に新たに中国から入ってきた宋時代の山水画の技法をとり入れて描いて、しみじみとした情趣を

たたえている。

これがつぎの時代の床の間や広間を飾る大きな絵画へとひきつがれ、さらに現代にもうけつがれている。

映画はこのように個々の絵巻の紹介にとどまらず、これらの絵巻を材料として時代の大きな流れを如実に描き出している。

だから、この映画自体が長大な絵巻になっている。絵巻と映画が非常に似た形式であることがそれを助けている。映画の作者は、貴族の没落をテーマに、古代社会の崩壊から中世の封建社会がはじまる激動の時代と、そのような時代に生きた民衆の姿と心をとらえようとしている。

■すべて国宝という珍しい映画■

尚、この映画に出てくる「源氏物語絵巻」「鳥獣戯画」「伴大納言絵詞」「餓鬼草紙・地獄草紙」「一遍上人絵伝」すべてが国宝であり、プロログの平安貴族の生活や「やまと絵」を伝える「山水屏風」(神護寺)も、仮名の美を見せる「元永本古今集」もともに平安時代のもので、国宝に指定されている。音楽も、平安朝貴族が生活の中でも愛好した催馬楽や、民衆が熱狂した田楽や念仏踊りを民族芸能に求めるなど、特殊な音楽効果を目ざしている。

製作スタッフ

製作・脚本・監督：村山英治
編集：長谷川宣人
撮影：中村誠二
音楽：長沢勝俊
照明：鹿島俊男
解説：内藤武敏
助監督：川田一郎
録音：朝日録音機
撮影助手：長尾正人
現像：東洋現像所